

令和3年度（2021年度）春季特別展

新芦屋古墳

—被葬者の謎にせまる—

令和3年（2021年）4月24日（土）～5月30日（日）



新芦屋古墳木室復元（当館常設展示室）

新芦屋古墳は昭和53年（1978年）11月、市内新芦屋地区で宅地造成中に発見されました。古墳は丘陵の稜線上にあり、眼下に平野部がひろがり、茨木・高槻の山並みが遠望できるところに立地しています。横穴式墓室には石棺が安置され、人骨のほか耳環や玉、直刀などの副葬品がおさめられていました。その墓室をかこむようにして木室がもうけられていたことも判明しました。しかも木室古墳で石棺をともなうのは新芦屋古墳が唯一の事例です。建造時期は出土した須恵器の年代から7世紀の初頭と推定されています。また、装飾馬具が一式副葬されており、石棺とともに被葬者の地位をかنگえる手がかりとなっています。

新芦屋古墳の復元模型は常設展示の入口にあります。来たる特別展示「新芦屋古墳—被葬者の謎にせまる—」では石棺の実物資料をならべたり、木室古墳の分布を考察したりすることで、被葬者の謎にせまりたいとかがえています。

（当館特別館長 中牧弘允）

謎がいっぱい！新芦屋古墳

古墳情報

所在地：吹田市新芦屋上

墳形：方墳(推定)

大きさ：約20m×20m(推定)

時代：7世紀初頭

埋葬施設：横穴式木室

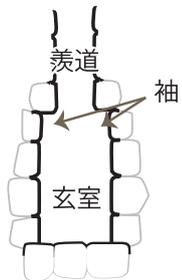
棺：石棺 復元：全長2m11cm、幅83cm、高さ87.7cm

粘土で石棺を覆う

副葬品：鉄地金銅張馬具、直刀、玉、耳環、須恵器、土師器

被葬者：最低でも2人。うち一人は20才前後の男性か。

謎 新芦屋古墳の埋葬施設は、全国的にもめずらしい横穴式木室。横穴式木室は、埋葬施設の構造が横穴式石室と同じ羨道、袖、玄室で構成されるが、石ではなく木を使用したものをさし、全国で117例が報告されています。この数字は、日本列島に築かれた古墳の総数からみると、とても少ない事例です。また、分布域も石川県、静岡県、大阪府、兵庫県に多く、限定的に分布します。こうしたことから、横穴式石室に比べ埋葬施設としては主流ではないことがわかります。



横穴式石室の構造(平面図)

縁にある丸い穴が、木の柱が建っていた跡。穴の空き方から、木の柱は直立していたことがわかります。



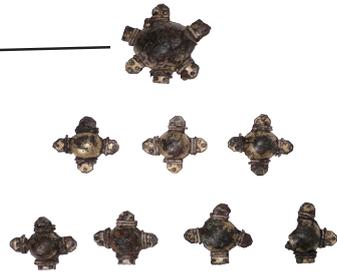
新芦屋古墳発掘の様子



粘土をはがしていくと、鉄地金銅張の馬具がみつかりました。

謎 出土品の鉄地金銅張馬具は、この古墳に埋葬された人が地位の高い人物であったことを物語っています。馬具は、大阪府の指定文化財になっています。

装飾馬具は権力の象徴でもあるんだ



雲珠と辻金具

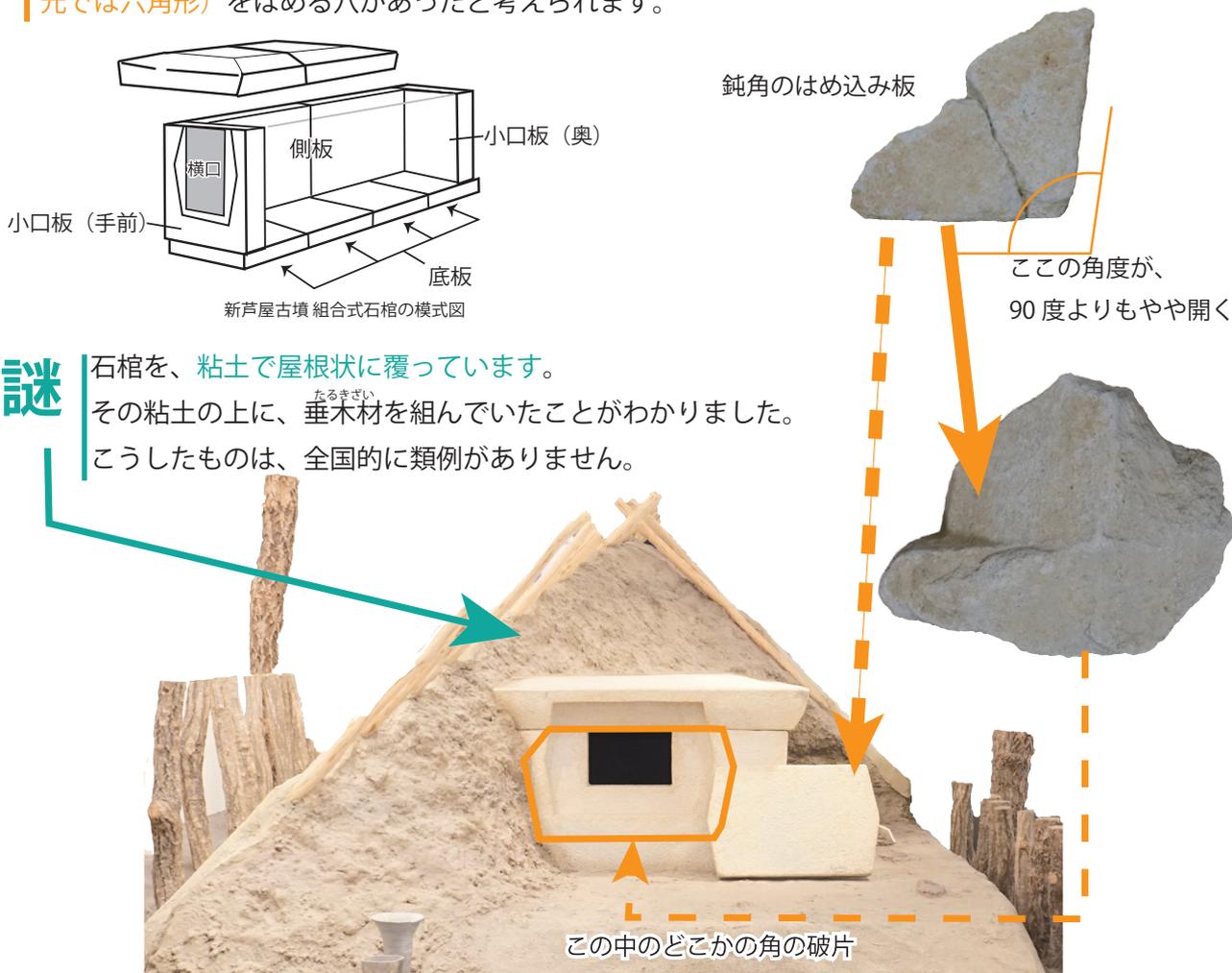


ぎょうよう
杏葉

謎

横穴式木室の中には、小口板^{こくちいた} 2 枚、底板^{そこいた} 4 枚、側板^{そくばん} 各 2 枚、屋根型の蓋で構成された組合せ式の石棺^{くみあわせしきのおさ}が納められていました。復元では横口^{よこぐち}を持つ組合せ式家形石棺^{くみあわせしきいえがたせつかん}であることがわかり、石材は火山礫凝灰岩^{かざんれきぎょうかいがん}、石質凝灰岩^{せきしつぎょうかいがん}と鑑定されました。

また、新芦屋古墳の石棺は、横口を持つ珍しい形であることがわかりました。手前の小口板は破片資料のため、全体を復元するのは難しいですが、残された破片から鈍角^{どんかく}のはめ込み板（復元では六角形）をはめる穴があったと考えられます。



謎

石棺を、粘土で屋根状に覆っています。
その粘土の上に、垂木材^{たるきざい}を組んでいたことがわかりました。
こうしたものは、全国的に類例がありません。

この、新芦屋古墳の最大の特徴である「石棺を納めた横穴式木室」の類例は今現在も見つかっていません。さらに、組合せ式の石棺で、手前の小口板に開口部^{かいこうぶ}をもち鈍角のはめ込み板をもつ例も見つかっていません。ただ、一見特殊にみえるこれらの要素は、古墳時代後期から古墳時代終末期へうつりかわる前の段階の現象と、とらえることもできます。

他に類を見ない新芦屋古墳ですが、石棺に遺体を納めることや、須恵器を使用した葬送祭祀、鉄地金銅張の馬具などから、ヤマト王権と繋がりがある、この地域を治めた有力な豪族であったことは確かでしょう。

(竹原千佳誉)

<参考文献>

柴田稔 1983 「横穴式木芯粘土室の基礎的研究」 考古学雑誌 68-4

小森哲 2013 「横穴式木室考—先行研究の整理と分布・構造からみた地域間交流—」 『考古学雑誌』 第97巻 第4号 日本考古学会

熊谷晋祐 2015 「『横穴式木室』の再検討—一体に石材を用いない横穴系埋葬施設の基礎研究—」 『Archaeo-Clio』 第12号 東京学芸大学 アーキオ・クレイオ刊行会

吹田市役所 1981 「第4章 古墳時代 5古墳各説」 『吹田市史』 第8巻



令和3年(2021年)1月29日、京都市立大学教授の菱田哲郎さんに、新芦屋古墳についてお話をおうかがいしました。



菱田哲郎(ひしだてつお)

京都大学大学院博士後期課程中退後、京都大学文学部助手、同大学文学部博物館助手を経て、京都市立大学文学部教授。専門は考古学。

中牧：平成25年度(2013年度)に北大阪ミュージアム・ネットワークで、「謎の古墳を探る」というシンポジウムを開催し、先生にもご報告をいただきました。今度も「謎」でもう一回勝負しようと「新芦屋古墳―被葬者の謎にせまる―」というタイトルで、4月から特別展示を開催しようとしております。先生からそのあたりのお話をぜひお聞かせいただこうと思います。実は私は新芦屋に住んでまして、特別の興味というか思いがあって、私は古墳が発見された翌年から住み始めて、のちに近くに古墳があったということを知りまして、それ以来新芦屋古墳とお付き合いをしています。現在は、地元の人たちが説明板を作ろうということで、市に働きかけて文化財保護課により説明板が設置されました。市民グループも時々見学に來たりして、古墳のおかげで住民も吹田との繋がりを持っています。学術的には現状はどうなっていますでしょうか。

菱田：全体的に今は遺跡の調査が少なくなって、特にこういう変わった木室墓が新たに発見されるのは非常に少ないんじゃないでしょうか。あの頃は次々と茨木からも枚方からも出てきました。それは昭和から平成にかけての日本の文化財調査の特徴だった

と思います。平成以降は、過去の調査資料をもう一回見直して、その価値を再発見していく方にシフトしている感じがしますね。

中牧：当時は宅地開発ってのがどんどん進んで、千里丘陵はそのさきがけとして開発されたんですけど、新芦屋のようなその周辺地域の造成も進捗していった、それに伴い見つかったわけですが、そういう意味では千里ニュータウンにほとんど古墳がないってのは本当なのでしょう。

菱田：新芦屋のような淀川が見えるエリアと見えなくなる奥のエリアとの違いがあって、おそらく高槻、茨木も含めて摂津はどこもそういう感じがあって手前の山裾はものすごく稠密に遺跡が存在して、特に見晴らしが良いところに古墳を置きたがるっていうことがあるんじゃないでしょうか。

中牧：なるほど。あの世でも眺めの良い暮らしをしたいという。

菱田：古墳は下に住んでる人たちから見えるランドマークでうちの先祖はあそこにいるぞっていうこともあると思います。

中牧：新芦屋からはそれこそ高槻や茨木方面の山並みが見えます。

菱田：その眺望の重要性が立地と関係しているんだと思います。

中牧：古墳時代以前は、東奈良遺跡で銅鐸がたくさん作られました。そういう意味では銅鐸から古墳へみたいな話。これは結構考古学でも注目されてる時代区分というか。

菱田：そうですね。弥生時代で一番特徴的な器物というと銅鐸を思い浮かべる方も多いと思います。ムラの象徴としての信仰対象、宗教的記念物としての銅鐸があって、次の時代はお墓に一番力を入れて、ムラの長がそこに眠り、それが見えるように表示したのが古墳というふうに。弥生時代の人たちと古墳時代の人たちの宗教的感覚を器物がきれいに表わしていると思いますね。

中牧：北摂の地域はその銅鐸から古墳へというのがよく分かる地域とも思ってまして、今回北摂をク

ローズアップしたいなとは思っています。

菱田：北摂は何かあれば中央の工人たちがやってくるような、王権の中心に近い場所という地の利を持っているんじゃないかなと思いますね。

中牧：新芦屋古墳は木室墳、須恵器、装飾馬具がセットになっていて、しかも唯一石棺を持つという特徴を持っていて、それぞれのテーマで追究しないといけない問題かなと思っています。

菱田：それぞれの地域の頂点にあたるような人たちで、他であれば、6~7世紀にかけての時代は、大きな横穴式石室を築いて自分の威勢を示すというのが本来の姿だと思うのですが、あえて木のお墓、木室を採用したところに、ものすごい自己主張というか、我々はこういうものに入るのだという意識がおそらく表示されています。とすると、どうしてそういうことをあえてしたのだろうか、あえて木室墓を選択したのはどうしてだろうかということが、大きな謎を解く入口かなと思います。

中牧：先生は以前のシンポジウムで、木室墳は小松(石川県)あたりの陶工たちのグループにより広がったというようなお話をされましたが。

菱田：木室墓の起源地の研究はいくつもあって、小松が一番古いのか、あるいは東海にも古いものがあるので、なかなか決しがたいところではあるのですが、新芦屋の前段階である6世紀代に木室墓が流行っている場所が小松のあたりで、小松の「こま」は、「高麗」で、朝鮮半島との行き来をする港が小松の起源地だとされています。その時期にはオンドルのようなものを部屋に置く住居もたくさん見つかっています。直接的な文化の渡来がある地域なんですけど、そこで木室墓が出てくるのが、注目されています。また、その木室墓を見渡すところに須恵器生産地が広がっているので、この被葬者像を考えるヒントになるのではないかなと、前は紹介させていただきました。もちろん関西でも大阪府南部の陶邑が須恵器の一番大きい生産地ですが、その近くでいくつも木室墓があり、須恵器生産をしている人とこの木室墓に何か関係がありそうというのは以前から言われています。つまり新芦屋古墳に先行する6世紀代からそういう関係はありそうなんです。そうすると吹田の千里は窯業生産地帯ですから、そういうもの

と関連付けられるのではないかなと思います。

中牧：東海の方にもずいぶんあるんですね。それはやはり近畿から東海の方に移り住んでいった？

菱田：いえ、東海にも古いものがありますので、一概に近畿あるいは北陸の方からだとも言えなくて、どこが起源地で、本当に古いのかはもう少し調べないといけないかなと思っています。6世紀前半の様子は資料が少ないので、なかなか起源地を決めるのは難しいところです。

中牧：小松というのは高麗の津ですが、朝鮮半島の南の方から来た人たちが定着していったのですか？

菱田：いえ、7世紀代の資料では「こま」だと高句麗を表わすことになるのですが、北陸へ来た渡来人の起源地がどこかというのもなかなか難しく、通常南の方から来たと考えるべきなのかなとは思いますが、渡来人の起源地問題も簡単なようで難しいです。

中牧：須恵器はあきらかに南の方からですね。陶質土器っていうんですか、私も釜山でいろいろ見ましたけど、似たようなものがたくさん展示してありました。陶質土器の名家はどこなのでしょう。

菱田：テクニック自体が日本に伝わっていますので、技術者も来てるといのは間違いなのですが、当初来たのは朝鮮半島でも伽耶の一部、今で言う金海から馬山にかけての人たちということは分かっています。さらにその後、いろんな地域の陶質土器の影響を受けていることも分かっています。百濟土器の影響もあります。そういう意味では多元的といえますか、向こうは技術を持った人たちが半島のいたるところにいて窯を作るわけですから、その一カ所だけが日本の須恵器の起源地になるということではなくて、それぞれの所から入ってきたものが日本のなかで集大成されていく、そういう動きがあるということが分かっています。

中牧：新芦屋古墳の須恵器もよく残っていますね。

菱田：新芦屋古墳の頃になると日本での生産が完全に定着して、技術改良を何度も加えられています。窯が全国で非常に増える時期ではあるのですが、そうすると技量の優劣というものは覆いがたくありまして、畿内の陶邑やここ千里の製品はすごく焼きも良いし、作りもしっかりしている。ここは本当中心地だなと思います。新芦屋古墳の出土品を見てても、

図面だけ見るとあまり違いは分からないのですが、実物を見るとよくできているなという印象を持つと思います。

中牧：須恵器は昔は行基焼と言われていました。河内は行基の出身地でもありますね。「須恵」の字をあてるようになったのは明治になってからですか。

菱田：学問的にはそうなのですが、奈良時代の人たちがすでに「すえの器」と呼んでいます。その時は「陶」の字で「すえ」なんですけど、ごくまれに万葉仮名で須恵と書かれたものがあり、明治の学者がそれを見つけてこの須恵で呼ぶことにして「須恵器」になりました。奈良時代の人でも「すえ」と呼んでいたことは間違いないので、そういう意味では復活させたということでしょうか。ただ、江戸時代は少し忘れていたので行基焼と呼んでいたり、明治以降も祝部土器が主流で、次第に奈良時代の呼び方を復活させた須恵器が普及します。

中牧：何でも行基さんにかこつける名称というのが結構ありますね。

菱田：いえ、でも行基の存在は大きいと思いますね。例えば土塔のおそらく一番上にあつたと思われる建物のさらにその上で用いられたと思われる円筒状の須恵器には、「天皇尊霊」という文字が刻まれています。意味はよくわかりませんが、大事なところに行基が関わっているのだから、行基もそれなりに須恵器生産に関わっていたというのが分かります。

中牧：文化人類学ではアメリカ人のジョン・エンブリーが熊本県の須恵村を調査し、『須恵村』という本を出しています。そこには地元の住民も「須恵」って何の意味か全く分からないと書いてあります。他の地名はみんな理解できるけれど「須恵」の意味が分からないとしています。でも字を充てたのからすると須恵器を作っていた村なのかなと思っていますけど、どうなんですか。

菱田：まさにその通りで、須恵器を焼いていた人たちはすでに須恵器と呼んでいたのだから、ここは須恵を作る村だということで、いろんな所に須恵村というのができていくんですね。古代の人たちが呼んでいた言葉が綺麗に地域に伝承されて地名となって現在に残っている。それが各地の須恵村かなと思いますね。千里には須恵の地名が残らなかつたんですね。

中牧：もう一つの謎が装飾馬具ですね。ああいう金メッキを施した馬具が副葬品として納められる例は結構あるんですか。

菱田：威儀を正すという点では、鎧の他に特に刀が古墳時代の後半では重視されていたと思うのですが、同時に馬に乗るわけで、馬を飾る、飾り馬であることがすごくステータスのシンボルとなっています。

中牧：陶工は馬を何に使ったのですか。

菱田：いえ、馬の一番大きな役割は騎馬で軍用です。ところがあんな煌びやかなものをつけていくことは通常考えにくい。中国の壁画古墳には軍隊の行進風景に飾られた馬が描かれています。こうした影響下で飾り馬を重視するのは東アジアでは非常に共通しています。馬は戦闘にも使いますが日本の場合豪族たちが乗ってみせてあるいはそれで並んで、いくつかの騎馬部隊の馬揃えなんかの際に欠かせない形であったのではないかと考えられています。

中牧：馬が入ってきたのは5世紀ですね。それは馬だけではなくて人もついてきて？

菱田：そうです。馬を飼い、増やす技術と調教して乗りこなす、この両方がないと馬はなんの役にもたちません。それが全てセットで入ってくるのが5世紀初めです。5世紀には定着して、この王権の近くが一番大きな牧が四條畷市のしとみや葦屋にありました。牧は広い面積を必要とするので、瞬間にもっと馬を飼いやすい辺境の長野や山梨の方にひろがっていきます。馬は特に移動が簡単にできますから、遠くで作って必要な数だけ持ってくるという体制に比較的早い段階からなっていくんだと思います。

中牧：馬というと我々文化人類学の方では江上波夫先生の騎馬民族征服説が非常に注目をあびたんですけど、今はあまりこの説は取らないようですね。

菱田：例えば国立歴史民俗博物館におられた佐原さんが特に馬が伝わってきた5世紀の渡来人の技術を非常に高く評価する一方で、それ以前の弥生・古墳文化も評価しています。日本の文化はミックスされているところがあって、その中の重要な要素に馬を飼っていた人たちの文化は相当にあると考えるべきだと思います。

中牧：騎馬民族というのが特にユーラシア大陸のス

キタイなんかの民族国家から始まって、その文化的な伝統をひいた集団が天津神や天孫族と必ず関係があるというのが江上説でしたから、それも終戦直後にそれまでの皇国史観をひっくり返し、征服されたことになって。江上さんの報告を聞いたことがあります。朝鮮半島から先に渡って来た人たちがどういうふうにひろがって大和政権に繋がったのか、それが考古学で物証として見つければと強調されていたのをよく覚えています。

菱田:江上先生の好敵手だったのが小林行雄先生で、江上説を否定するかたちで日本の国家形成、古墳時代の成立を論じました。江上説が当たってるかどうかではなく、馬を旗印にして物の見方を変えさせた。日本への渡来文化の研究への道筋を示したという点はすごく大きいと思います。

中牧:もう一つの謎は被葬者が誰であったかということなんですが。人骨がちゃんと残っているというのが新たな研究の対象になるのではないかと思うんですが。

菱田:日本は酸性土壌のために骨は残りにくいというネックがあります。運よく残った骨からどこまでいえるか。地域にたくさん残っていたら比較ができますが、そこがむずかしいところです。ただ、歯の形から親族関係を探す。つまり、一つの墓で二体骨がでて、それが男女の骨であった場合、夫婦関係か、兄弟姉妹関係なのか。お墓に入る人の原理を示す研究が評価されています。それが夫婦なのか元の出自で入るのかを検討しないとはいけません。横穴式石室の家族墓がどこまで木室の方にもいえるのかはありますが、新芦屋古墳の時期は馬をもたらした渡来人の文化といっしょに夫婦を基本とする、家族で入るのが原則の時代になっています。木室墓の場合、何回開けて追葬しているのか。今回の展示でも再分析してほしいです。この時代、大きな横穴式石室墓の場合、5体以上あるのもある。新芦屋古墳では横から入れるお墓の原理と木室墓の関係を掘り下げる必要があります。

中牧:^{じょうじやま}上寺山古墳は火葬されていますが、新芦屋はされていない。火葬は文献では道昭が初めてですが、上寺山古墳はそれ以前に火葬していた。そういうのも外来の仏教的な火葬の習慣なのか、別の観念から

火葬するのか。そのあたりはどうでしょうか。

菱田:木室墓が見つかった初期の段階は焼けた例が多く、そのため、かまど塚と呼ばうとして、一種の火葬であるとする考えが定着しました。しかし、この手の古墳は火葬墓ではなく、焼いていない例が相当あることが分かってきました。まさに新芦屋古墳がそうです。火葬のためという考えは崩れますが、焼いたものがあるのも事実です。もう1つは普通の横穴式石室でも焼いている例があるのが知られてきて、墓の形式とは別に墓を意図的に燃やすことが7世紀にはある程度認められます。7世紀の埋葬習俗には火葬が認められるわけです。では燃やした木室と燃やさない木室はどう違うのか。これは人の観念の問題で、人の心の中が覗けたらわかるんですが、考古学では届きません。現在でも仏教徒だから火葬するとは限りません。土葬も行います。仏教=火葬とすると誤ってしまいます。

中牧:浄土真宗は火葬しますが、他の宗派はそうでもない。

菱田:同じ地域でも火葬にするための燃料となる木の資源がない時期には土葬になったりします。燃料も影響している面があります。

中牧:今回は新芦屋古墳をクローズアップして展示しようとしています。大和、河内を中心として発達してきた学問の世界に対して北摂も捨てたもんじゃないと一石を投じたい気持ちがあります。

菱田:都の一角に組み込まれた場所とでもいうべき、今の首都圏が古代にもあって古墳時代は都が河内、大和を行き来しますが、その外側の首都圏はその動きにかなり影響を受けて、その動向を映し出す鏡のようにみえる場所です。それが北摂エリアであり、いちローカルな話ではありません。北摂エリアは都をみる大きな視点につながる場所ではないでしょうか。

中牧:勇気をもらう結論をいただきました。

菱田:研究材料は同じでも、もう一度再検討することは大事です。見過ごしていたところにヒントがあります。見えなかったものを拾っていく作業にぜひ取り組んでもらえたらと思います。

中牧:本日はありがとうございました。

ペーパークラフト
で

新芦屋古墳をつくろう！

新芦屋古墳が作れる、ペーパークラフトのご紹介です。
見た目は方墳なのですが、なんと墳丘が開く仕様になっております。さらにその内部には、新芦屋の謎＊
横穴式木室と屋根形粘土層と石棺を再現。

方墳にして飾ってよし。パカッと空けて内部を楽しむのもよし。一粒で二度おいしい新芦屋古墳のペーパークラフトは、当館のホームページからダウンロードすることができます。是非チャレンジしてみてください。

パカッ

あれます！



ただの方墳だけじゃなく



なんと中には横穴式木室が！

ダウンロードはこちら

トップページの「紙で作れる文化財 ペーパークラフトを作ろう」
もしくはバーチャルミュージアム「紙で作れる文化財 ペーパークラフトを作ろう」へ。
http://www2.suita.ed.jp/hak/suita_papercraft/papercraft.html

令和3年度(2021年度)春季特別展 「新芦屋古墳—被葬者の謎にせまる—」 関連イベント

講演会 各回：午後2時～3時30分

- ① 5月1日(土)
「新芦屋古墳の発掘調査」
藤原 学 氏 (元吹田市立博物館学芸員)
 - ② 5月9日(日)
「横穴式木室と火葬—上寺山古墳を中心に—」
清水邦彦 氏
(茨木市教育委員会 歴史文化財課 学芸員)
 - ③ 5月22日(土)
「新芦屋古墳と古代嶋下郡のミヤケ」
菱田哲郎 氏 (京都府立大学文学部 教授)
- 申込／① 4月13日(火) ② 4月27日(火)
③ 5月11日(火) 必着

歴史講座 午後2時～3時30分

- 5月29日(土)
「新芦屋古墳を読み解く」竹原千佳誉(当館学芸員)
■申込／5月18日(火) 必着

申込方法

いずれも要申込／定員40名

吹田市役所ホームページの電子申し込みシステムか、はがき、またはFAXに講座名、参加者全員の氏名、郵便番号、住所、電話番号を記入のうえ各締め切り日までに博物館まで。
申込多数の場合は抽選となります。

吹田市立博物館だより 第85号 令和3年(2021年)3月31日発行
編集・発行／吹田市立博物館
〒564-0001 吹田市岸部北4丁目10番1号 TEL 06(6338)5500 FAX 06(6338)9886 ホームページ <http://www2.suita.ed.jp/hak/>



この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。



この冊子は2,500部作成し、1部あたりの単価は26円です。
森林認証紙と植物油インキを使用しています。